

広島大学における英語教育

西 谷 元

英語に対する学生個人の興味また運用能力は千差万別である一方、社会また学内からは益々より高度な英語運用能力が求められている。他方、多くの学生はCEFR B2に達することなく卒業しているのが現状であり、これは「自分の専門分野での技術的な議論を含め、その話題が具体的でも抽象的でも、複雑な文章の主旨を理解できる」英語力に達していないことを意味する。

さらに大学には、学生の語学力向上とともに、より広い意味でのグローバル人材育成が求められている。グローバル人材の定義は様々である。しかし、その是非に関わ

らず、語学力が、グローバル人材が有するコンピテンシーの重要な要素の一つとして、またグローバル人材概念の客観的・測定可能かつ相互に比較可能な、ほぼ唯一の指標として捉えられることさえある¹⁾。

1. 英語力の測定・把握のための取組

このような、学内外からの要請に対し、広島大学は、客観的データに基づいた施策を計画・実施(EBPM)している。広島大学では2008年以降、全額大学負担により、全学の学生を対象に、TOEIC IPテスト²⁾を利用した語学力の測定・把握を行ってきた。また、当該テストにより入学直後に英

語のレベルチェックをし、成績別に英語授業のクラス分けを行ってきている。2008年から2011年までは、入学直後2年間に4回のテストを実施し、主として教養教育期間中の学生の英語力を測定・把握した。この期間における学生の英語力変化の傾向が明らかになったため、2012年及び2013年は、卒業までに4回のテストを実施し、教養教育及び専門教育期間を通じた英語力を測定・把握した。これらの結果の分析を踏まえて、2014年以降は、卒業まで2回の指定受験、また年2回の希望受験の提供も含め、継続的に英語力の測定・把握を行っている（全学生の約半数にあたる7,500人が毎年受験）。

2. 測定・分析の結果

上記のような継続的な取り組みにより、全学の学生の英語力の推移の特徴が明らかになった。図1に示すように、入学時の語

図1 TOEICスコアの推移（全学）

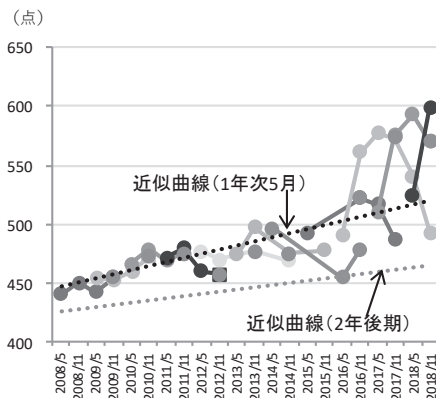
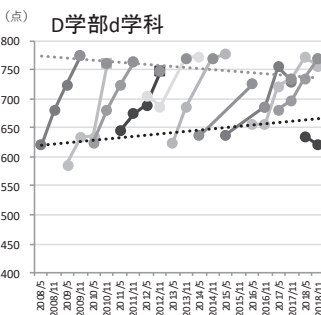
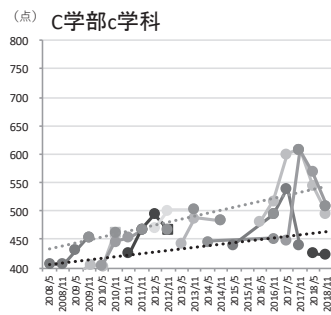
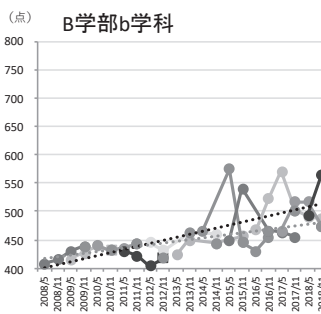
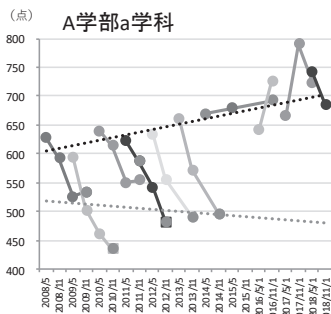


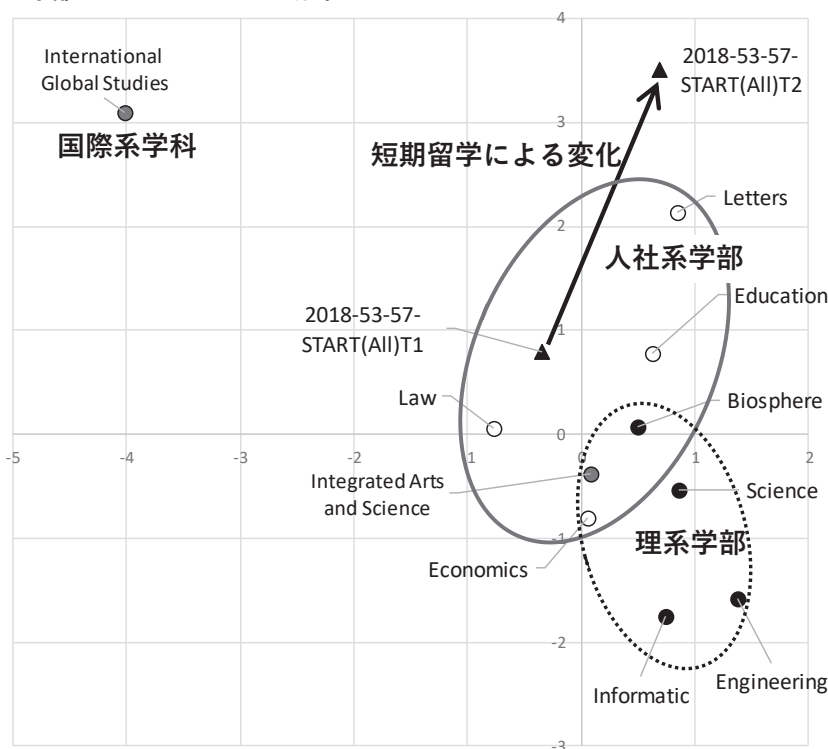
図2 TOEICスコアの推移（学部・学科）



学部・学科により英語力に対する考え方が異なる，との推定は働く。どのような学生がこのようなパターンを生じさせているのかを明らかにするため，表面妥当性を排した質問からなる臨床心理学に基づくテスト，BEVIを1年生全員（約2,400人）に対

心理特性の分布を、さらに詳細に分析すると、学部により、海外など外の世界に興味を有する学生の割合が大きく異なることもわかった(図4)。デシル9、10の学生割合は両学部ともあまり相違はないが、デシル8以下は文系学部の方が高い(4以下は反転)。このことは英語力の高い学生数とも相関性を有している。

図3 学部ごとのBEVIスコアの分布



3. 個人別期待値の設定

このように、学生の心理特性また動機は学生各々異なることから、学部・学科を一つの教育ユニットとして捉えながらも、各学生の特性に着目する必要があると考えた。

英語力のスタンダード設定に関しては、学部横断的また全学生対象に均一の目標値を設定した場合、高い目標設定により進級又は卒業が困難になるという弊害が生じる。

他方ある程度目標設定を低く設定することにより、上記のような弊害は減るが、専門教育における十分な語学力（CEFR B2程度）を確保し、グローバル人材育成を行うという目的を達成することができない。またこのような目標値を既に達成している学生の語学力上昇へのインセンティブとはならず、むしろ語学力上昇の阻害要因とすらなる可能性がある。

そのため、広島大学では、これまでの語学力の測定・分析の結果に基づき、学部学生の30%が卒業までにCEFR B2に達することを目標とした（2014年に採択されたスーパーグローバル大学創成支援事業Type Aにおける目標値）。また同時に、2016年より、入学時の英語力を基準として、大学が学生各々に英語到達期待値を設定し、在学中にどれだけ英語力を伸ばすかの数値目標としている。入学時の基準値として、原則として、入学直後に実施するTOEIC

図4 文系学部と理系学部のBEVIスコア分布

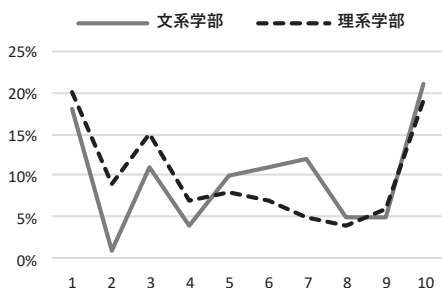
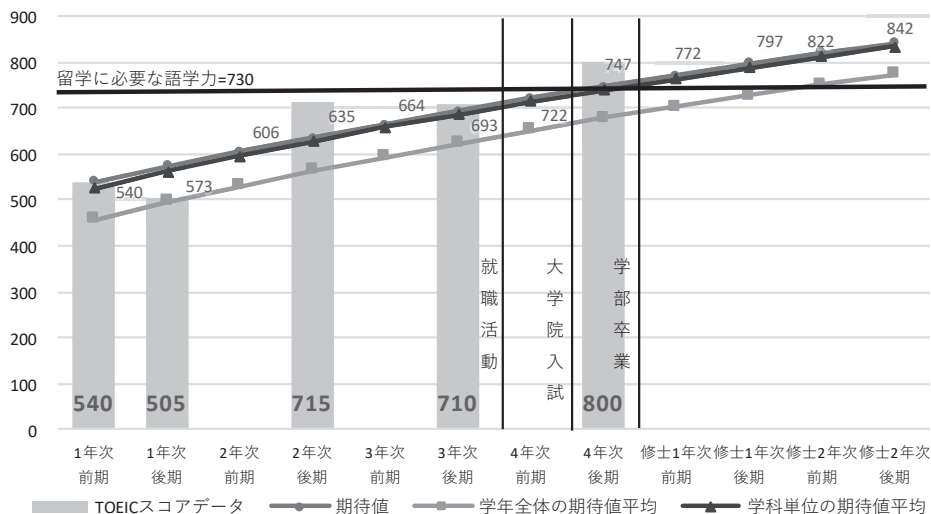


図5 個人別期待値の表示例



IPスコアを用いた。

この入学時基準値をもとに、授業以外に英語を年間200時間程度継続的に学習することを前提とし、学生個人ごと、半年毎に設定した。また、当該期待値は、定期試験成績等を表示するために用いられる学生向け情報総合ポータルを用い学生に周知している。

4. 現状・将来

SGUの各種の施策（特別英語クラス・留学プログラム等）の成果もあり、CEFR B2を達成する学生数は、着実に上昇している。しかし、SGU当初の計画目標は達成することはできなかった。また、個人別期待値の達成率も十分とはいえない。そのため現在、どの施策が英語力強化に寄与しているのかを、センター試験スコア・受講科目・教員属性・GPA・BEVIスコア等、大学の有する広範囲のデータを用い、関連性を明らかにしようとしている。

各学部・学科ごとの、素点の変化と個人別期待値の達成率の分析より、学生また学部ごとに、英語力上昇への動機が大きく違うことも明確となっている。このような期待値を用いたアプローチを用いることにより、教養教育と専門教育を通じた、4年間又は6年間の英語教育を構築することが可能となる。また各学部・学科ごとに異なる学生の動機にあったプログラム構築も可能になると期待される。

学生の入学時の英語力の差を前提として、広島大学においては、このような客観的なエビデンスに基づいた施策を実施することにより、CFER B2を達成する学生数を増

加させる同時に、個人別期待値の達成度を用いることで、全学生の英語運用能力を伸ばすことができると考えている。

(注)

- 1) 『グローバル人材育成推進会議 審議まとめ』（2012年）(<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/>)
- 2) 広島大学では、過去12年間、5万件以上のデータの集積またその分析が存在するため、当面はTOEICを用いて測定・分析を継続することを計画している。
- 3) 2014年スーパーグローバル大学創成支援事業採択。2016/11以降は年二回の希望受験のデータを含む。
- 4) *The Beliefs, Events, and Values Inventory* (BEVI) (<http://jp.thebevi.com/>) の尺度スコアによる主成分分析の結果を示す。「社会文化的オープン性」また「グローバル社会への関与」に関する尺度スコアが高い場合、第一象限及び第二象限の上部に配置される。
- 5) 一般的には効果が少ないといわる短期留学プログラムも、参加学生は、非参加学生と比べて、心理特性が大きく変化していることが明らかである。また並行して行った調査・研究からは、語学スコアの結果を長期間のスパンで分析した場合、短期留学プログラム参加者のTOEICスコアが大きく伸びていることが確認された。差の差分析によるプログラムの因果効果推定量は44.3点の改善となった。また傾向スコアを用いた補正をかけた因果効果推定量は39点であり、依然として統計的にも有意な値を示した。(川田・西谷 <http://urx.red/VvEr>)

(広島大学 副理事 (SGU担当)・法学部教授／
国際機構法、国際経済法)